

令和5年度 愛知県栄養教諭研究大会

令和5年8月23日（水）愛三文化会館にて研究大会が開催されました。

教育講演会

演題「栄養教諭のキャリア発達

ーチーム学校での専門性発揮のためにー」

愛知みずほ大学人間科学部心身健康科学科 准教授 後藤 多知子 氏

栄養教諭の仕事は、子どもたちの心身の健やかな成長に大きく貢献しており、社会で期待される栄養教諭になるためには、専門性を発揮することが重要であると再認識しました。学校組織の中で他の教職員との連携・協働は必要不可欠で、特に専門性の方向が一致している養護教諭と栄養教諭が協働していくことが大切であると教えていただきました。



さらに養護教諭の定義、特質等をお話しいただき、養護教諭の役割について理解を深めることができただけでなく、栄養教諭に置き換えてみることで、「栄養教諭とは」「子どもたちをどう導いていったらよいか」といったことを具体的に考えることができました。また、栄養教諭は一人職であるため、新任も含め、すべての栄養教諭が、食育・学校給食のスクールリーダーとしての役割を期待されているとお話がありました。校内においてリーダーシップを発揮していくためには、専門性の向上に励むとともに、教職員の理解を得られるように、自分の活動についての発信を強化していきたいと思えます。

【ご講演を拝聴しての感想】

食育の推進や学校給食の管理において栄養教諭の専門性を発揮し、中核的な役割を果たすために何が重要か考えることができました。自身の活動の見える化や発信力の向上、教職員と積極的に交流することも意識的に取り組みたいです。そのために、教室へ出向いて子どもの実態を知り、感じたことを教職員に伝えたり、相談したりするよう心がけていきたいです。

先生のご講演の中で「独自性の強みを生かす」という言葉が印象的でした。できていない弱みばかりに目を向けていた自分を反省し、弱みを改善していくことに加え、強みを伸ばすことも大切にしていきたいと思えました。

今後は、食に関する指導と給食管理を一体として、児童生徒の食に関する健康課題を支援できる栄養教諭の強みを生かし、校内の先生方と連携し、子ども達の健康をサポートできるよう日々研鑽していきたいと思えます。

「チーム学校」といわれる中、縁の下の力持ちになるのではなく、「私が栄養教諭としてできることは何か」という思いをしっかりと発信できるよう、これからは失敗を恐れず職務にあたりたいと思えます。ただ子どもたちに伝えるだけではなく、子どもたちが自ら考えて生涯役に立つ食に関する指導ができるよう、学校で生活を共にする無二の教諭になりたいと思えます。

展示・ポスターセッション



研究発表をした東三河地区（豊川）と新城・設楽地区の食育の取組や「愛知を食べる学校給食の日」の取組、協議会作成物

「あいちの農産物資料集」等を紹介した展示が、もちのきホールロビーで行われました。展示物を見学し、意見交流している会員の姿が見られ、会員相互の交流や学びあいの場となりました。

式典

愛知県教育委員会 保健体育課 課長 祖父江達夫様をはじめ、愛知県小中学校長会、公益財団法人愛知県学校給食会、愛知県高等学校給食研究協議会、愛知県特別支援学校長会他多くのご来賓の皆様にお越しいただき、ご祝辞を頂戴しました。



地区別研究発表

東三河地区（豊川市現職研修委員会栄養教諭部会）

「将来の健康を考え、規則正しい食生活を実践できる子の育成
—「朝ごはん学習カリキュラム」の実践を通して—」



発達段階に合わせた「朝ごはん学習カリキュラム」を構築し、朝ごはんと生活リズムの重要性について理解させた。保健センターの栄養士の協力を得て、大人になったときの健康を考えさせるための活動を行った。そして、生涯にわたって規則正しい食生活を実践させるために、規則正しい食生活をする和健康コインがたまる食生活マイレージを実施した。取組により、栄養を考えて朝ごはんを食べる児童を大幅に増加させることができた。

新城・設楽地区（新城設楽栄養教諭・学校栄養職員部会）

「地場産物のよさに気付き、残さず食べる子の育成
—地場産物の栽培活動や「地産地消の日給食」の実践を通して—」



地場産物のよさに気づかせるために、八名丸さといもの栽培や生産者との交流を行った。地場産物が新鮮で安心安全なおいしい食材であることを理解させるために、食育だよりや動画を用いて紹介したり、地場産物を味わう地産地消給食の日を計画的に実施したりした。取組により、地場産物を知っている児童や給食を残さず食べる児童が増加した。

指導講評

愛知県教育委員会 保健体育課 主査 天野万喜男 氏

東三河地区、新城・設楽地区の発表について、指導講評をいただきました。

東三河地区は、児童が実体験に基づいた知識・技能を身に付けることを狙った研究となっていた。朝ごはんカリキュラムの構築、実施はとても手間がかかる。実践を通して、子どもたちのために尽くす尊い姿勢を忘れてはいけないと感じた。児童が学んだことを発信する取組から、目指す子ども像に近づくことができていた。今後は、個々の細かい変容が分かるような手立てを考えて、よりよい実践に取り組んでほしい。

新城・設楽地区は、児童に「地元」の食材を使用することが食の基本として、意識づけを図る研究となっていた。地場産物を取り入れた給食を楽しみにしている児童の様子から、目指す子ども像に近づくことができていた。今後は、地場産物の紹介資料の有効的な活用方法や、地場産物をまだ知らない児童の様子を分析し、よりよい実践に取り組んでほしい。

「授業大好き！」な先生から学んだ子どもは「授業大好き！」になる。みなさんも、今回の研究発表を自分の地区の実態に沿ったものにして、ぜひ、実践に臨んでほしい。というご指導をいただきました。